

9度の失敗があって1度の成功がある

京都大学教授山中伸弥さんに2012年のノーベル医学・生理学賞が授与されることになった。山中さんは2006年、マウスの皮膚細胞に4つの遺伝子を導入することで、世界で初のiPS細胞（人工多能性幹細胞）の作製に成功した。iPS細胞はあらゆる細胞に分化する能力を持つ万能細胞の一種で、患者自身の細胞から作れば拒絶反応も起きないという利点があり、難治疾患を治療する再生医療の本命として期待されているが、広く実用化した段階で授与されるのが通例である医療分野のノーベル賞が、まだ現在進行形の研究に対して与えられるのは、極めて異例だという。

表題は山中さんの言葉だ。山中さんは実に多くの苦労を重ねてきた人である。中学・高校での柔道や大学でのラグビーで骨折を何回も経験したことから「スポーツ外傷の専門医」を志したが、不器用で、研修医時代「上手な医者なら20分で済む手術に2時間も」かかり、点滴にも失敗するなどして指導医から「お前は邪魔ナカヤ」と怒鳴られ「地獄の日々」を送ったという。「手術をして元気になって帰っていくという明るいイメージがあった」整形外科も、脊髄損傷など深刻な患者は名医でも治せないという現実も見た。

自分の腕に見切りをつけ、「重症患者を救うための基礎研究をしよう」と臨床医から研究者に転じた山中さんだが、そこで待っていたのもまた試練。薬理学教室での研究の後、マウスのES細胞（胚性幹細胞）の研究のため米国に留学。帰国後、大学に戻ったが、研究環境の違いで実験用マウスのお世話ばかりに追われ、周囲からは評価されず、自分の研究が本当に人の役に立つのか、意味を見失った時もあったという。臨床医に戻ることも考えたが、最後にもう一度研究に挑戦しようと、99年奈良先端科学技術大学院大の助教授に応募。以後こつこつとiPS細胞研究の礎を築き、ついに最高の荣誉に到達した。

山中さんは、受賞決定直後の記者会見で「研究生活は1割バッテリーでも大成功。9回失敗しないと1回の成功はやってこない」「何十回トライしても失敗ばかりで泣きたくなる20数年だった」と振り返った。しかし、それでも山中さんは言う。「失敗すればするほど幸運は来る。若い間にいっぱい失敗して、挫折してください。」失敗と失敗を乗り越えることから得たものの大きさを実感しているからだろう。

失敗は、成功への道を絞り込むためのデータを与えてくれる、いわば成功へのプロセスだ。しかし、日本には失敗や試行錯誤を無駄と考える土壤がある。失敗を、プロセスではなく最終評価の対象とする傾向が強い。だから失敗をさせないようにする。ひたすら正しいやり方正しい答えを教える。学習者は一生懸命にそれを覚えるというのが教育の方向である。日本の若者は失敗に弱い、打たれ弱いといわれるのもそこに原因がある。しかし未来には、今はまだない未知のもの、新たな課題が出てくるはずだ。答えは用意しておけない。それらに立ち向かう力、失敗にめげず未知のものを探究する力を若者自身が持っていなければならない。大人たちは頭を切り替えて、失敗から学ぶ力を育てることに取り組まなければならない。

（編集部）

JADECニュース88号（2012/11/30）より